

第 119 回 『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

今回は多様性という中に含まれる、「遠慮」と「攻撃」についてです。

まず、「遠慮」についてです。遠慮という言葉は、誰かが何かで思い悩んでいるようなとき、そこに踏み込むかどうかの選択を前にして、「そっとしてあげようよ」というように使うことばです。遠くにいて、慮る。それは積極的なやさしさとしてもありえるが、消極的に使われることもあるのです。ここで湯浅さんは、「関わっても、どうせ背負いきれないから」、「違うんだから、どうせわかりあえないから」「かえって迷惑かもしれない」からというように考え、関わらないことが正当化されるために使われる言葉だと述べています。「みんなちがって、みんないい。(だけど自分は関わられません)」というのが「遠慮」だということです。遠慮という言葉が、関われないことを正当化する理由として使われているのです。一見謙虚に思われますが、そうではないということです。

そして「攻撃」です。対面する場面ではほとんど聞かないことばです。主にネット上で展開されています。人数も、多くはないだろうと思われれます。しかし、「みんなちがって、みんないい」という、上から与えられた「善いこと」のタテマエ感にうんざりしたときはけ口として活用されることがあるのです。「みんなちがって、みんないい。(だけど自分は許さない)」というのが「攻撃」だと湯浅さんは述べます。

本当にその通りだと思います。「みんなちがって、みんないい」といいながら、そこには排除がことばとなって表れているのではないかと思うのです。これについて、湯浅さんは、このようにも述べています。それは、これは、多様性が帰着した結果だということです。

いずれの現象も、多様性に反しているのではありません。違いがあることはどこかで認めているからです。そして、これは、多様性が当然にもたらす結果なのだということです。その理由は、違うんだからというものです。自分と違うものをつきあうのは、同じものをつきあうのに比べて、とてもめんどろなことです。このめんどろさは、多様性という違うものばかりの中で、自分に近い同じものを探させます。そして、それらを集めます。それは小さい集団になるので、これを、湯浅さんは多様性の中で細分化していることと述べています。この細分化された集団の中での居心地の良さの中に踏みとどまることが、多様性の中での違いを理解できないものにしていのです。これは分断です。

細分化と分断が現象として起こっているということです。家庭の中から大学のキャンパス、社会と国家、そして国際政治まで、今起こっていることは、こういうことではないか、と湯浅さんは指摘します。しっかり考えなくてはならないのは、これは多様性からの逸脱ではなく、多様化がもたらす当然の帰結だということです。どうしてもこのようになってしまうということです。

では、どうすれば、この状態から前に進むことができるのでしょうか。湯浅さんは、そのような理由があるから多様性を否定すべきではないと述べます。現にある多様性を封じ込めて、純化さようとするのは、現実的ではないのです。移民の受け入れを止めたところで、多様性から解放されるわけではないからです。日本人同士でも、健常者同士でも、たとえ家族であっても、人と人は、すでに、十分、多様だからだ。同じ人はいないということです。このような状況で必要なことは、多様性もつ細分化と分断の傾向と向き合いながら、それを乗り越えることができるように考えるということです。そのためには、単に多様性が大切だというだけでなく、何らかの要素を多様性に加える必要があるのです。言い換えれば、多様性がすばらしいものになるためには、多様性だけでは足りないということです。

では、どのような要素を加える必要があるのか、次回その続きを述べていきたいと思います。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。